

新井白石と利瑪竇(上)

附 世界屏風圖考

藤田 元春

一、西洋紀聞と利瑪竇

新井白石の西洋紀聞中巻をみると、大地海水と相合して其形圓なる事、球の如にして天圓の中に居る、たとへば鷄子の黄なる、青き内にあるが如し。其地球の周九萬里にして、上下四旁皆人ありて居れりと記してあるが、實はこの文句は、利瑪竇の「坤輿全圖」に記した文をそのままに寫し取つたものである。全圖に曰く、

地與海本是圓形而合爲一球、居天球之中、誠如鷄子黄在青内(中略)則地之東西南北各一週有九萬里實數也。

利瑪竇のこの學説は、明志天文志に記した通り、近世天文學及地理學の支那に渡つた嚆矢であるから、同書にも、神宗の時、西洋人利瑪竇等中國に入る、天文曆算之學に精しく、微を發し奧を闡く、運算製器、前此未嘗有也。と頌め、こゝに其要論を擧げて篇に著すと記した程で、いかに古を尙ぶ支那の學者と雖も、この地球説には反對が出來ず、全くその説に服したものである。北極星の高さによつて土地の緯度を測り、支那の里數で毎度二百五十里に當るから、地球の周九萬里になるといふことの

如き、全く利瑪竇の首唱する所であつた。それと同時に坤輿全圖に記す所の外國の地名や人情風俗、珍奇な風聞といふやうなものは、すべて支那人には初めて聞くところの事實であつた。（拙著尺度綜考 参照）

新井白石が後に出でて西洋紀聞や采覽異言を述作するに當つて、この坤輿全圖に従つたのも當然のことであつたが、白石は坤輿全圖の外に當時官府にあつた舶來のオランダ鏤板の圖を見ることを得、且官命によりローマ人シロテ及オランダ人等について、海外の事情を問ひたし、大に發明する所があつたから、やがて彼の著述は利瑪竇の及ばざる所を補ふことが出来るやうになつたのである。そこで予はまづ白石の「西洋紀聞」にか程利瑪竇の坤輿圖説と出入があるかといふことを述べてみやうと思ふ。萬國坤輿全圖を見ると、

又以地勢分輿地、爲五大州、曰歐邏巴、曰利末亞、曰亞細亞、曰南北亞墨利加、曰墨瓦嶺泥加。

といふ句があるのに西洋紀聞をみるとこのメガラニカといふのがない。今其文章を引いてみる。

凡その地を分ちて五大州となす。一にエウロバ、漢に歐邏巴と譯す、某はじめ漢音の如くによびしを、西人聞きてこれ支那の音非也といふ。後また阿蘭人に問ふに、そのいふ所も亦然也。むかし我俗ヨウロウハといひしは、漢音の轉訛なり。俗に奥南蠻といふ地方即此也。

二つにアフリカ、漢に利末亞と譯せるは即此、三つにアシア、漢に亞細亞と譯するは即此、阿蘭陀鏤板の圖による、四つにはノナルト・アメリカ、蕃語ノナルトといふは此には南といふ、漢に以上三大州共に一圖の内にありて地上界とす。

ト・アメリカに南亞墨利加と譯する即此、（この文誤り）五つにはソイテ・アメリカ、ソイテといふは此には北といふ、漢に北亞墨利加といふ。（これ又誤）阿蘭陀鏤板の圖によるに

以上二大州共に一箇の内、
にありて地下界とす。

右の文章のうち、白石が漢に譯する何々といふのは、すべて利瑪竇の圖に従つたものであつて、歐邏巴の羅字に是があるのも、原本に忠實に従つてゐる。但し南北アメリカについては誤つた。猶この文章によつて、世界を舊大陸と新大陸とに分つ二半球の世界全圖なるものゝあつたことがわかる。

蓋し白石は坤輿全圖をみると同時に、この兩半球世界圖をもみたのであつた。序に云ふ、坤輿全圖は *Geographica Journal*. Vol. I. No. 4. Oct. 1917 に英人 *Heawood* が解説した通り、日本で卵形圖といふプロゼクシオンであり、オランダ、フレミツシユ派のオルテリウス圖式である。この圖式は又其創始者の名によりてアピアン圖式ともいひ、只今では楕圓形投影法といふものである。

つぎに兩半球圖の東洋での製作は、白石が之を見た時よりも早く康熙十三年（西紀一六七四）に白耳義人南懷仁が支那譯をした坤輿全圖に既に用ひられてゐたものであるが、平射圖法によるか、若くは之を改良したグローブラー圖法に従ふものが最も多く用ひられる。南懷仁の兩半球圖は經線が緯線によつて完全に等分されずして、圓の端にゆく程距離が廣がるから、平射圖法である。やがてそれがグローブラーにかはる。白石のみたものは恐らくグローブラーであつたであらう、他にその例があるからである。但しグローブラー圖法は一六六〇年頃に創始されたのであるから、南懷仁の原本と殆ど同時

のものである。但し日本で兩半球圖の出版は、ずつと遅れて寛政にならぬと出来なかつた。

さうした次第で、白石の漢譯といふは、すべて利瑪竇に從つたのであるが、利瑪竇のメガラニカなるものを白石は紀聞の上で無いものにしたのみでなく、各州の境界についても、利瑪竇の記す所に合しない地名を記入した。そのうちには利瑪竇の譯を正さんとした所もあるが、明に白石の誤つた點もないではない。オランダ製の地圖を見て、利瑪竇の記事をいかに變じたかを明にするために、予は之を左に表示するであらう。

	利氏の坤輿圖	英語、現在名	白石の紀聞
歐羅巴の南	地中海(正)	Mediterranean	マール・カスビヨム(誤)
同	臥蘭的亞(正)	Greenland	グルウンランデヤ(正)
同	伯爾作客海(正)	?	オセヤリス・ツフナンテリヨナトリス
同	東	R. Don	タナイス河(正)
同	東	墨河的湖(正)	ボントヒキミノス(誤)
同	西	大西洋(正)	Sea of Azov
同	西	大西洋(正)	Atlantic Ocean
同	北	大 浪 山(正)	マール・アトランテイフム(正)
同	北	地中海(正)	カボテ・ホネ・イスフランザ(一字誤)
同	東	麻打曷失島(正)	ニゲー・テラーニウム(正)
同	東	西・紅海(正)	マダカスカ(正)
同	西	河摺亞諾滄(正)	マール・ループロム(正)
同	西	河摺亞諾滄(正)	マール・ループロム(正)
同	西	河摺亞諾滄(正)	オセヤリス・エテウビークス、 河摺亞諾滄 <small>ホッヂヤアウツレン</small> と讀(誤)

亞細亞の東	小東洋(正)	支那海	ナセヤース・スネンシス(正)	支那海
同	西	大乃河(正)	前	見
同	西	墨河的湖(正)	同	同
同	西	地中海(正)	同	同
同	西	紅海(正)	同	同
註	南北アメリカはいづれも誤がない、すべて四方が海であつて、南北の間に微地 <small>びち</small> を連ねるのみであるからである。			

さてこの表をみると、アジヤ、アフリカ、ヨーロッパの三洲について其境界を記すに當り、利瑪竇には少しも誤譯がないが、残念ながら白石の方に誤がある、これは白石が日本人であつて西方語に通じなかつた結果であつた。

第一にマレー・カスビヨム、即今の裏海を以て歐洲の南境としたことは白石の誤である。當時の地圖では歐亞の境はウラル又は裏海とせず、大乃河タナイであつた。白石のタナイスといふはTanaisであつて、今のドン河の舊名である。現在のソヴェエツトロシヤでも、ドン河の東にはスラヴでないタートル自治州やコサツク自治共和國がある。欽察の侵入以後アジヤ民族の居住が濃厚な所となつたから、歐亞の眞の境はドン河であつた、この事はロシヤ人も認めた所で古い文政年間の青地盈(林宗)の「輿地誌略」にも、歐維巴の壇域をのべて、

然れども近時ペトロボリスの學館にて考定せるロシヤ國圖には窩爾加河(Volga)の一侧、蒙的斯批撒爾勃里(モリスバールボリ)(カザンの西)と須刺河(スラ)(Sura)ヴォルガの一支、カザンの西で北流する(默獨物地沙河メドウィチヤ)Medwitsa 即ドン中流の名)及屯河の亞瑣弗海(アソフ)に入處を二州の界

とす。是地方土人の舊説なり。

と論述してゐる。従つて利氏の記事は正しい。故にこの黒河的湖と記したのは今のアゾフ海でなければならぬ、アゾフ海の古く名は *Palus Maeotis* である、墨はメ、河はホ又はオ、的はチであるからメオチスを墨河的と利氏が譯したのは正しい。それを白石は誤つてポントスエキシーンノスと混じた。エキシーンノスは黒海である、*Black or Euxine Sea* である。利氏の漢譯をみるとかやうにいづれも正しい。假令ばアフリカ南端を大浪山とするが如き、一四八六年バルトロメオ・チアスが到達した時暴風浪に會したためカポ・トルメントゾと名づけたところが葡王は之をカポ・デ、ボア・エスペランザと改名したのを、利氏はトルといふ原名を大浪と譯して、發音のみでなく初名の意味にも合する様にしたのである。利末亞の西、即アフリカの西に河摺亞諾滄とししたのもやはり河摺亞諾滄 (*Oceanus*) 即大洋といふ語の漢譯とみて正しい。しかし白石はこれにホツヂツチャアノウアンといふ假名をつけ、またはエテウビークスといふ名を擧げたが、今日ではその意味が不明である。恐らくカナリー島の高山のことでもあらうか。

歐洲の北に伯爾作客海といふのが、利氏の圖に見えるが、白石はこれをラセヤームス・ツフナンテリヨナールリス（これは恐らくスピッベルゲン島の *Thousand Isles* 海の轉訛であらうと考へる）とした。但し采覽異言の中には伯爾作客海を海中の一小島名で、ベルアイランド *Bere Is.* だとのべた。果して

然らばベルを伯爾と譯した利氏は正しいが、伯爾作客とある以上は白石の言ふ所のベル島が、西紀一五九六年（慶長元年）以後に探見されたことから考へて妥當しないと思ふ。或はこの四字はバルチック海の漢譯ではなかつたかと考へる。但し利氏の圖には、別に波的海といふのがスカンデナヴィヤの南の海に正しく入つてゐて、この方はノルウェーの肩、白海の北に記してあつて今日の Bay of Chukotka にあたる、作客はチエスカの漢譯であるらしい。しかしさうだとすれば伯爾の二字の意味がわからぬ。この點に於て利氏の圖も亦若干の簡錯がある。

紅海の古い羅匈名はエリスリアン又はルブルム Erythraean or Mare Rubrum である、利氏が紅海と意譯したのも、白石がルブルムと記したのも正しかつた。但し紅海を何故に西としたかといふに別に北アメリカのカリフォルニア海に東紅海といふ譯がある。カリフォルニア海はもとコルテス海といつたが、眞珠の漁場であつたので、東紅海とつけたのであらう、従つてこちらが西紅海となつた。まづかやうに並べてくると、白石の譯に誤があつて利氏の譯には誤が少ない。しかし利瑪竇の地圖には誤が全然ないといふわけではないから、白石によつて指摘された部分が少いとはいへぬ、其一二を拾つてみると、

其一はトルカの條、「萬國全圖（筆者曰くこれが白石の親しくみた兩半球圖である）都兒瓦、或此イタリアにトルコといひ、他邦にてはツルコといふ、漢に譯せし所未だ詳ならず。萬國坤輿全圖利未亞州大

耳瓦國あり、馬爾馬利加（ツリホリの西）の地に近し、其大耳瓦或はこれトルカの音の轉じ訛れるか」と記してあるが、いかにも坤輿全圖にはサハラ沙漠の中バルバリア（巴爾巴里亞）の南に、小さく大兒瓦國と書いてある、猶又「黒入多（エヂプト）」を註記し泥羅（ニル）河の毎年の泛濫をのべてゐるが、土耳其領たることを明記しない。しかるに白石はトルカをアフリカ諸國の中に置き、その武勇をしるし、「アフリカの地方悉くこれトルカに屬し」とのべてゐる。これは白石が坤輿全圖に従はずして、萬國全圖に従つた一つの例である。

第二に白石は坤輿全圖に據るに、韃靼の東方、海に至るまでの地を圖して、狗國、室韋、野作等の國、其地ありと見えたり、阿蘭陀鏤板の圖によりて、オランダ人の説をきくにエゾ、（漢に譯して野作といふ我國にて蝦夷といふもの即此地）の地タルターリヤに相聯れるや否や未だ詳ならず。本國鏤板の圖には、エソ東南海口の地のみを圖し、此海口に至て、こゝにいふ所のマスに似たる魚多く食ひし事を註したりと。」

註 故山崎直方博士所藏のヒーター・ヴァン・デル・アー一七〇〇年版の日本圖にもエゾの一部が圖の右上に過大に記され、朝鮮は島となつてゐる、さうして博士の没後、追憶のために其複製を世に配付され、解説を付け、「ヨーロッパ人は久しくエゾが獨立の島かアジア大陸より派出する半島かを決定し得ず、」十七世紀の前半に始めて彼等の地圖上に記され、十八世紀の半頃迄、多くの地圖は、之をアシヤの半島若くは其西部を不明のものとして書きたりとある。以てこのオランダ圖のエゾを類推しうると思ふ。

かくて白石は坤輿全圖の日本及蝦夷の圖が不確實なることを指摘した。しかし同時にオランダ人の

地圖にも僅にエゾの東南のみが記されてゐたことを明にした。この事は白石の見た世界全圖の地形の精密さを語るものである。たゞしかうした比較が出来た結果白石はオランダの地圖を信用し「萬國坤輿全圖に見えし所盡くに信すべからず」と斷定した。茲に於てか白石が坤輿圖の五大州の一つであるメガラニカを除いたのも、やはりさうした知識によつたのである。

二、白石の見た萬國全圖とメガラニカ

坤輿全圖と白石の見た地圖との最も大なる差は上述する通り第一に其プロゼクシヨンが違つてゐたこと、其地名に詳否の別があつたこと。若くは日本の附近で野作エノが違つて表示されてゐたこと等であるが、就中その最も大なる相違は、太平洋の南にメガラニカ州なるものが、あるか、ないかといふ點であつた。故に予はこゝでメガラニカなるものについて、一應の解説をしたのであるが、話の順序としてまづ白石の見た地圖そのものゝ性質を明にした上で、その點に及ぶことにする。白石の紀聞の中には、(中卷)

按ずるに「大西洋、地球、地平等の圖(これは利瑪竇の圖のことなり、後出)其由て來る所まだ詳ならず。大明吳中明(吳左海、坤輿全圖第二版に參加した人)萬國坤輿圖に題して、歐邏巴國中、鏤有舊本。蓋其國人、及佛朗機人(ホルトガル人のこと)皆好遠遊、時經絕域。則相傳而誌之。積漸年久。稍得其形之大全といふ。我今大西人にあひて歐邏巴鏤板の輿地圖を出して其説を問ふに、彼其圖を見てこれ七十年前(寶永六年より七十年前といへば一六三九年、寛永十六年版となる)、チ、ランテヤ人鏤はし、所也。其精妙いふべからず、今は西洋地方にも得易からざる所也、といふ、そのチ、ランテヤといふは、即今我國に歲々朝貢する阿蘭陀國の事にて、萬

國坤輿圖に噶蘭地、則蘭地オランダとしるして西洋布此二島最妙と注せしものは是也。（いかにも萬曆版には其通りかいてある）、

と記した。即彼は一六三九年頃の噶蘭地圖をみて、之を利氏の坤輿全圖と比較したのである。さうしてこの圖が兩半球圖であつたことは既述した通りである。西洋紀聞上卷にも、この圖のこと並に外人シローテ漂着の後、江戸にきて白石の尋問をうけ、種々外國の事情を問答したことが記されてゐるが采覽異言の序文を見ると、その方が簡潔に要領をつくしてゐて、この地圖の由來がいよゝ明になるから、煩を厭はずその文を引用する。序に曰く、

寶永戊子秋（西紀一七〇八）薩州管内多禍、海上忽有大船一隻、隱見出沒（中略）。數日而西去。是日島中見一人被服如我俗、而語不可曉者。州即報長崎。尋送到官。蓋羅馬國人也。及文廟（家宣）嗣位。初降旨長崎。起送其人于都下、和蘭通事從之。是歲己丑冬十月（寶永六年）特命臣美一按驗事由。

とあつて、屋久島に漂着したローマ人を通事と共に江戸に呼びよせたことをつげ、その姓名を左の如くしるした。

ヨハン・バツテイスダ、シロテ、羅馬人。

正しくは Giovanni Battista Sidoti であらう。

コルネレス・ラルテン、和蘭人で天文地理に通じ正徳四年歸途萬里石塘で難船して死んだ。

キヨデヨム・ホタン、同 印度に居ること六年天竺の地理風俗に通じてゐた人である。

ウイロン・ワガマンズ、同 醫者、動植物の學に達してゐた。

西圖、和蘭、アムステルダム所刻、ヨアンフラア撰

註一、この地圖が即西洋紀聞に、和蘭人に示したものである、テレキをみると J. O. Blaeu なる人の一六八七年の東支那海の海圖がある。もしこの人がこの全圖の作者だとすれば、年代が合はぬ。他に同名の製圖家が一六三九年頃にあつたのかとも考へられるが後に述べるやうに恐らく同人であらう。

註二、この時白石とシロテとの對談の通譯に立つた日本人は、今村市兵衛、英生で祖父の時からオランダ通事をつとめた家で、寶永四年大通事となつた。この人は今村明恒博士の祖先であるといふことだ。(歴史地理第三一の三號)

白石の序文によれば、この時以官庫所藏和蘭鏤板萬國輿地全圖。而其中有未盡釋者。使通事翻之以和蘭語。其說靡々可聽也。とのべ、その語によつて采覽異言といふ本が出来たといふのである。恐らくこれが西洋紀聞の萬國全圖であつて、坤輿圖に比較し盡釋せざる所を問ひたゞしたのである。異言の出来たのは正徳三年癸巳春三月、西紀一七一三年であつた。

そこでどうしてこの和蘭人迄が驚く程精妙なヨアンフラアの地圖が、官府にあつたかといふ事を尋ねて、通航一覽の中のオランダの献上物の目錄にあたつてみた所、卷二百四十二卷に、それと思はるゝは、明曆三丁酉年正月十五日、献上二十二品の内、一天之圖、一地之圖とあり、萬治二己亥年二月廿八日、甲比丹サウリヤス、ワフケハル献上二十一品之内天地之圖二ツ、寛文五乙巳年三月朔日献上十五品之内阿蘭陀國繪圖一冊、寛文十二壬子年三月三日(一六七二年)カビタンヨハノス・カムフィシ献上二十品の内世界圖二つとある、まづかうしたものが官府にあつた。この中で前にのべた通りこの

圖は寶永六年から七十年前のもの一六三九年頃の地圖だといふけれども、恐らくこの寛文十二年（一六七二年）に献上したものであつたであらう、但し白石が七十年も前といつたのは或は聞誤で、ヨアンフラアの一六八七年の海圖に近く、一六七〇年前後に出來たものを一六七二年に献上したのであらう。蓋しグローブラー（兩半球圖）のプロゼクションはNiccolosiが一六六〇年に始めたもので、Aaron Arrowsmith (Proje) が Globular proje. と名をつけたといふ歴史からみても、本圖が一六三九年版ではあり得ないからである。猶又官府のこのフラアの圖は、餘程くわしい大きい兩半球圖であつて（後に其證をのべる）後の世にも残つたであらうと思はれることは、すつと後世ではあるが幕府の命で文化七年に日本で前古未曾有の立派な新訂萬國全圖が出來た時（總裁は林大學頭衡で、間重富も事に當り執筆者は有名な高橋作左衛門景保である）其序文に「謹原太府見存圖本。又旁求清國西洋刻本若干種とのべ、主として太府の原本によつたことを明にし、その名を萬國全圖としたのみでなく、其出來上つた圖式は、白石のみた萬國全圖と同様に、兩半球の大圖でグローブラーと平射圖法が用ひてあることを併せ考へ、何だかこのフラアの圖を種本としたらしいことを想像するからである。（註、晝後、知友秋岡武次郎氏の來信によれば白石のみたブラアのグローブラー兩半球圖は、現に帝國博物館所藏二大世界古圖中の一であつて、一は小石川砲兵工廠にありしもの、一は傳來不詳である。十中九分九厘まで、白石の用ひし地圖だと断定して差支なしとある。もしもその二つ共に同じ地圖であるならば、寛文献上の世界圖二つといふことは同じものをもつてきたことになる。筆者はまだ見ないけれどもこの事を附記し、併せて秋岡氏の今後の研究報告をまつ）

註 賴野書目をみると、文化中縣官命高橋作左衛門景保。譯述地球。景保乃據哥氏之本。參攷諸圖。校訂刪補。別製平面圖。銅鐫之以行世。

とある、哥氏とは英吉利人哥烏玖即キャブテン・クックである、この時クックの報告を參照したのである。

獻上本は世界圖二つとあるから、一は兩半球圖であり、一は何かちがつた他のプロゼクシヨシであつたかとも思ふけれども、白石の言によつてはそれを明にしがたい。まづかういふわけで、白石が見た全圖は兩半球圖である。しかるに坤輿圖は卵形圖であるからその差異について、白石自身も大に疑問をもつた。故にかれは左の如き問答をした。輿地總叙に曰く、

美學_ニ示明_ニ備所_ニ刻_ニ萬國_ニ坤輿_ニ平面_ニ半球_ニ等_ニ圖_ニ以_ニ問_ニ其_ニ說_ニ。

註 白石がこゝで萬國坤輿、平面、半球圖といつたのは、坤輿全圖に利瑪竇が誌した序文の中に但地形本圖、今圖爲平面（實は卵形圖である）其理難于一覽而悟、再作半球圖者二焉云々とのべたそのまゝの語によつて、これを平面半球圖といつたのである。
（地球十五卷二號拙稿坤輿圖について參照。）

西人笑而對曰、我方舊有地球圖。近古已來和蘭鑲版山海輿地全圖、盛行于世（註オルテリウスの流行した事ならん、我國にも、長久保赤水の山海輿地全圖あり、利氏に從つたオルテリウスである）。地形渾圓本無可畫以入圖。譬如醫經有_ニ人形圖_ニ必要_ニ面脊_ニ二圖_ニ始可_レ明_ニ全體_ニ。故其圖分爲_ニ二圖_ニ並以_ニ南北_ニ極_ニ爲_レ經、赤道爲_レ緯、圖周分度、皆與_レ天應。中略

近觀_ニ支那人_ニ擬作_ニ平面_ニ半球_ニ二圖_ニ不_レ惟_ニ疎漏_ニ頗多_ニ亦其謬妄_ニ特甚_ニ。若_レ其所謂_ニ平面_ニ者_ニ地之圓體、變成_ニ扁土_ニ。至_レ如_ニ半球_ニ、最爲_ニ無理_ニ中分_ニ南北_ニ、爲_ニ兩界_ニ。榮_ニ繞_ニ東西_ニ爲_ニ四圍_ニ。果_レ如_ニ此圖_ニ則是_ニ其南界_ニ無_ニ北_ニ。而其北界_ニ無_ニ南_ニ也。且物象_ニ有_レ圖。要_レ使_ニ人便_ニ于_ニ觀覽_ニ耳。天壤之間、人跡所_レ及。古今未_レ有_ニ到_ニ于_ニ極星_ニ直在_ニ人上_ニ之地_ニ者_ニ。則是_ニ圖不_レ作_ニ而可_レ也。

といふ風に非常に支那の作圖をけなした。第一に球面を平面にかくといふことは出来ないことと告げ、球

の圖にすれば、自ら地球の面背がいる、東西の兩半球を要すること恰も醫書に人の腹背を要するが如くである。（白石は之を地上圈、地下圈と譯した）、然るに支那のこの圓球圖は赤道を以て南と北とにわけである。（兩極が中心で東西が周になる）これはいけない。かうした圖だと、南半球圖には北がない。北半球圖には南がない。方角がわからぬではないか。極星の下に人が立つといふやうなことは未だ嘗てない、故にこれはいけない、且支那の圖には物象をかいて、人の觀覽をひいてゐる、これは地圖ではない。（註、恐らく白石の見た坤輿圖には珍奇の獸や舟の畫のあるのを見たのであらう、京大所藏の萬曆版、仙臺縣立圖書館藏本の萬曆版何れも物象はないが、予の見た北京の利瑪竇には物象がある。又南懷仁の兩半球圖にも同じく物象がある。）

どうしてもこのグローブラーの兩半球圖がよいと説明したので、白石は合點したらしい。蓋し我國で最初に地圖學の初歩といふものをきいたのであるが半球圖（即平射圖法）又はグローブラー圖法といふものゝ性質までは白石にはわからなかつたのであつた。しかし坤輿全圖の南北兩半球圖の註をみると、明にその目的を明示して、地球の球體なることを理解するやうに作つたことがかいてある。けれども白石にはクローブラー圖法又は楕圓圖法といふプロセクションそのものが全くわからなないのである、それでオランダ人にかやうに胡麻化された。そこで南北半球圖と類似の圖法によつて出来る所の東西兩半球圖でなければ、地圖にならぬものと考へたのである。この點白石も一寸合點が早すぎた。しかしとにかく白石は、オランダの兩半球圖、それは野作がやゝ現はしかけてある程度、即一六六、

七十年頃、太平洋の北部は不明なまゝでの世界圖であつたが、これをみて坤輿圖よりも圖式の新しい上にオランダ人が、本國でもこんなよい圖は珍しいと賞めたものであつたから、いよ／＼坤輿圖を輕視することになつた。

ことに白石は利瑪竇を西人とは思はなかつたらしいので、采覽異言の跋に、いろ／＼オランダ人に聞いてもマテオ・リツチなる人をしらない。不思議だと思つて新增大藏國中の金閻鐘の始振關邪論を讀んだ所、竇はもと廣東傍近海島の間(香山縣)に生れ、北中國に學ぶもの、實に西方の人でないところ。いかにもさうだらう萬國坤輿全圖は、どうも地理と合しないとまで記してゐるのである。

これは勿論白石の誤認である、しかしこれによつて、支那人の中には、利氏は中國に生れて西に學んだものだなど、浮説するものがあつたことを證明するのも面白い錯誤ではなからうか。それはともかく白石は坤輿全圖に對し、オランダ人にたゞしてからは大に之を疑つたとみえる。そこで彼は一々その差點をあげてきくと、オランダ人が又うまく答へる。エゾのごときを和蘭圖についてきくと、オランダ人は、地圖といふものは大抵その經歷する所を以て圖にする、その至らざる所に於ては蓋闕如すと答へるといふ風で、いかにも白石を満足させた。そこで坤輿圖に記入があつても、オランダ圖にないものは、殆ど偽りであることさへ考へたので、彼はいよ／＼「メガラニカ」を削つてしまつたのであつた。但し坤輿圖と雖もメガラニカには人跡未到でよくはわからぬといふ註記をいれてはゐるの

であるが、しかし大陸の大きい形が記してあるのである。白石又曰く、

今其チ、ランド鑲板の圖に據りて、萬國坤輿圖并に三歲圖會、月令廣義、天經或問、圖書篇等に見えし所の圖を見るに、此等は皆其大略をしるせしのみ也。

（筆者曰く以てフラアの兩半球圖の大にして詳なることがわかる、何となれば萬國坤輿圖（利氏著）の萬曆版は六幅本で非常に大きく、又可なり細かい。それすら白石の見る所では大略をしるせしのみであつたのであるから、従つて予が前に述べた通りこの大兩半球圖によつて、高橋作左衛門の圖が出来たと想像する所以である。高橋の圖は極めて立派で大きい。彼が蝦夷の略圖をシーボルトにわたした廉で獄に下された際に、この高橋の萬國全圖も亦絶版にされた程のものである。

亦按ずるに萬國坤輿圖に歐羅巴、利未亞、亞細亞、南北亞墨利加の外に墨瓦刺泥加メガラニカの一州を加へて六大州とす、其説に墨瓦蠟泥メガラニカ（葡語Magalhans）係佛朗機國人姓名、前六十年（一五一九）始過此峽、并至此地、故歐羅巴去、以其姓名、名此峽、名此海、名此地（以上は利瑪竇の圖の文字である）其墨瓦蠟泥といふは即是マゴラの番音轉訛れるものにして、亦認りてチ、ランド人を以て佛朗機人となせし也（これは又誤を重ねた）されど阿蘭陀鑲板圖には南方一帯の地はいまだ詳ならずして其地名をたてしにもあらず。

かういふ風にメガラニカといふのは、オランダの地圖によると不明であり、不確である。又北アメリカでも、其西北の方は未詳である。強てこれを説くべからずといつて、白石はこの二つの地方の説明はしなかつた。猶その外にも、歐羅巴の北海中の州嶼は、端倪をしめすのみであり、蝦夷やタルタリヤ（韃靼）も詳でないから之を闕き、北米の内部でも分曉しないは省けりとのべて、さうしたことを以

て却つてオランダ地圖の正しきだとした。故にメガラニカといふのを取り去るに至つたのである。

同時に白石は坤輿圖の大なる二つの缺點を指摘した、第一は、東印度諸島の地理である、曰く、爪哇東方海中の島嶼大小三十餘、坤輿圖には甚だ多くの島をかいてゐる。しかしそれはオランダ圖とは合はぬ、坤輿圖には爪哇の正南に小爪哇及伯且がある、しかしオランダ圖にはない、西人も之をしらない、これは利氏が果して何によつたかわからぬとのべて、之を攻撃した。第二に坤輿圖のアフリカの南をみるとかのメガラニカをずつと擴げて、そこに鸚鵡地と註記し「此地多有鸚鵡之鳥故因名此」としるしたのを疑つて、

曰佛朗機商「曾如馬」船過此海。望見鸚鵡地、而未_レ能_レ泊。考_ニ之西圖_一、不_レ特_ニ地勢大異_一、而名亦不_レ同。蓋此地番方所_レ呼其語頗長、番名アオストラリヤインコグニタ、譯文從_レ省。而其用_レ字亦是借音。非_レ呼_ニ鳥名_一也。

と喝破して、インコグニタ即未詳の南大陸といふのを誤つて、インコといふ鳥の字をあてたといふのである。さうしてオランダの圖は坤輿圖のやうにメガラニカの如き大きい南大陸をかゝらないで、たゞ其西北一隅をしるし、餘はいまだ審ならざる故に之を省くと述べ、さうしたことが、苟もせざる點でオランダ圖が正確であるとのべた。

かやうに述べてくると白石がメガラニカを六大州から取り去つたのは達見であり、オランダ人の地圖の賜であつたといはねばならぬ。

ところが實は我國で出來た多くの外國地圖は、徳川時代を通じてメガラニカが書いてある。我國のみでなく康熙十三年（一六七四）南懷仁の坤輿全圖にも、南洋の大州にメガラニカをしるし、「一強力之臣名墨瓦蘭者往訪。因以其名命之。曰墨瓦蠟尼、爲天下第五洲」とある。但し千六百六十年前後の原圖であるから、澳大利亞の西半が既に探險されてゐて「新和蘭地亞」の形が出來かけてゐる點は、利瑪竇よりは一步進んでゐるが、この地圖よりも古いもの例令ば小川琢治博士がさきに伊太利で之を得られて、京大地理教室に寄託された十七世紀の地球儀にも、明にそれが記されてある。又元祿八年（一六九六）出版の西川如見の「華夷通商考」附圖をはじめ、天明三年十一月（一七八三）出版三橋釣客の「地球一覽圖」でも、下つては嘉永三年（一八五〇）出版の「地球萬國山海輿地圖說」でも、將又嘉永六年（一八五三）版の「萬國輿地全圖」でも、いづれもメガラニカのないのはない、さうしてその圖式はいづれも卵形圖即、坤輿圖のアピアヌス式であるのを例とする。換言すれば利瑪竇の圖を模して同様の圖式にした世界圖は、我國では十七世紀以後十九世紀の半に至るまで、流通し何回となく彫刻され出版されたものであつた。

しかるに白石出で、兩半球圖を説き、メガラニカの無いことを説いたころ、寶永五年（六年に西洋紀聞が出る）に出版された萬國總界圖は、すべて利氏に従つた卵形プロレクションで、南大陸の輪廓を入れることも其のまゝで、小爪哇や新ギネアをも記しながら、メガラニカといふ州名を削つて、自

是南方地方到者少故未審其人物如何としるしてゐる。この事も又勿論利氏に従つたのであるが、しかし利氏のメガラニカといふものを省くやうになつてゐるから、このメガラニカを無くすることは白石に始まるとは云へないかもしれぬが、併し白石程之を明確にした人は前にはなかつた。それと同時に一方ではメガラニカをもつ舊式地圖が、嘉永六年頃迄も出版されてゐたことは事實であり、寛政八年になつて（一七九六）やうやく橋本宗吉の「噶蘭新譯地球全圖」が出版されたとき、白石の見たと同様な兩半球圖であつたのが、我國の學界又は出版界の狀況であつた。

所がこの橋本の世界圖は和蘭陀の（亞都良察^{アドラサ}）によつたものだといふ事が其序に明記されてゐるが、一七〇〇年出版のW.H.の地圖のやうにメガラニカは無くなつて、オーストラリヤは西の半部だけ書いてある、そこには西オーストラリヤの舊名レウイン(Leeuwin)千六百廿二年檢出、エーデル(Eidel)千六百十九年檢出、又はオーストラリヤ南海岸の名であるノイツ(Neitz)千七百廿七年檢出といふ注記がある。しかしこの千七百廿七年といふのは誤であつて、やはり千六百廿七年頃にノイツが檢出したのであるから、この圖はどうしても十七世紀の終寛文十二年頃のオランダ^{アドラサ}地圖の譯であることがわかる。さうしてこの圖の出來た頃になつても、その圖上ではまだ日本の周圍の地形カラフトや北海道は正しくはなかつた、何となればラベルズが日本海やカムチャツカを探見したのが、一七八七年（天明七年）であり、キャプテン・クツクが北太平洋を探見したのが、安永八年（一七七九年）であつたので

あるからである。

故に白石の見た地圖は橋本宗吉の譯した喙蘭新譯地球全圖の原本とひとしいものであつたであらう。勿論大小精粗の差はあつたことゝ思はれる。たゞし日本版の世界地圖は文化七年（一八一〇）幕府の命で高橋景保が兩半球式による「新訂萬國全圖」を出版するに至つて、その發達のクライマックスに達し、今日の地形と全くちがはぬ地圖が出來其後民間でも地圖の學大に進み、嘉永五年佐渡宿根木、新發田收藏の出版した「新訂坤輿略圖」は再び卵形圖を復活し、メガラニカの無くなつたことを注記し、又安政五年には（一八五八）武田簡吾といふ人が千八百四十五年版英國庸普爾地出版の「輿地航海圖」といふのを出した、これはその名の示す通りメルカトル法のプロゼクシヨンであり、これに先づ嘉永六年己丑（西紀一八五三）には地球萬國方圖といふ方格平面世界圖が出版されたこともあり、やがて文久元年（西紀一八六一）には佐藤正養の「新刊輿地全圖」が出版された、これは眞のメルカトル圖式で一八五七年和蘭の書肆ゼ・フ・ステムレルの鏤版を、翻譯複製したもので、餘程詳密な木板色刷手押の精巧なものであつた、蓋しこの圖はかの文化七年高橋作左衛門の唐紙に刷つた兩半球圖以後出色のものであつたから、やがて明治三年には、そのまゝ地球萬國方圖といふ名で「大日本法銅鑄開基第二世松田玄々堂綠山」（拙著平安京變遷史參照）によつて複製せられ東京で發賣されると、同じく四年に京都の橋本澄月も亦同じものを銅版に模刻し、村上勘兵衛から發售した、面白いことはこれらのメルカトル

地圖なるものは、すべて地名が詳細であり、發見の記事も亦文化の兩半球圖などよりも微細になり、例令ば慶長十一年ウイリヤム・ヤンセン。〔*Duyfken*〕といふ船を駛して始めて澳大利亞に至るとか、^{セントエリツカ}聖厄里那島^{ナゼアン}拿破倫此島に流されて死すなどといふ註記が至る所についてゐるのであつた。蓋しこの發見記事が入ることは、囑蘭新譯地球全圖出版以後、明治初年迄の世界地圖出版の一大特色といつてよいのである。

いづれ他日機を得て、かうした我國に於ける世界地圖の出版とその圖式の發達又は源流といふことについて、予の卑見を發表するつもりではあるが、とにかく我國で世界地圖といふものについての學問上の進歩を概括すると第一は卵形圖で舊式のメガラニカのある坤輿圖が其の模式となつて正保以後天明から嘉永六年まで約二世紀の間を支配し外國といへば五大洲（この時には南北アメリカを一洲とみて、メガラニカを加へる）又は六大洲など諒解したのが第一期であつて、それは實に利瑪竇の智識以上には一步も出なかつたことを證する。つぎに第二期にオランダの地圖が入つてきて、白石の眼に止まり、はじめて兩半球圖の美點を學ぶと同時にその圖式の出版も現はれ、メガラニカは無くなるべきものときまり北米の北西は不明であり、日本の北方エゾなどいふのは白石のみた地圖上では當時猶不明であつたにも不拘、東印度諸島ジャバ附近は坤輿圖よりも大に正確な地圖が出來たといふ時代が出てきた、さうして最後に日本でメルカトルの地圖が出來る時代となつて、其原本の出版から、凡十

年内外で之を複製しうるやうに、まづ西洋と殆ど同時の出版が出来るやうにもなり、やがて明治の維新に入つたのであつた。

以上縷説することによつて、新井白石の紀聞や異言が利瑪竇よりもいかに程進歩し同時に其後のものいかに影響したかといふことを、明にしたつもりである。

それと同時に我國に於ての世界地圖といふものゝ進歩したこと及圖式のかはつてきたことも明にしたつもりであるが、さうした豫備の智識から、越前福井淨得寺の世界圖屏風なるものを見ると、畏友牧野信之助君や、大日本史料の編纂官たちがその圖を以て慶長から元和寛永までの世界地圖である、（國寶）といふことが、いかにも根據がうすいやうに考へられるので、予はこゝにこの淨得寺の世界圖屏風の圖式や製作年代といふものを附考としてみたい。何となればその圖示する世界智識は全くこの白石の采覽異言や紀聞に一致して、北米の北西が不明であり、野作^{エゾ}がやゝ現れかけて、メガラニカを失ひ爪哇の附近が坤輿圖よりも遙に明確に圖示されてゐるといふことになつてゐる等々あまりにも白石の研究した世界地圖の程度に吻合するからである、或は白石の紀聞や異言を熟讀した好事の人が、正徳以後に之を作成したのではないかと考へるからである。又其圖式が古い時代の方圖であるといふことが却つて我日本の世界地圖の出版の歴史からみて、新しいものだと考へしめる一理由である。筆を改めて世界圖屏風そのものについて説明を試みるであらう。